Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第8回　ネスター・カストロ　フィリピン大学教授

文化を学び、異文化をつなぐ懸け橋となる

～異文化理解教育の先駆者たち～

第二次世界大戦後、異なる文化を理解し、相手との意志疎通を図るための教育と研究が世界的に高まりをみせていきました。そのひとつである異文化コミュニケーションの基礎となる主要な学問は文化人類学です。フィリピン大学人類学部の学部長であり、国際社会科学団体連盟の会長を務める人物にネスター・カストロ氏がいます。カストロ氏は、大学で人類学の教育に情熱を注ぎながら、一方で異なる文化の懸け橋となる「文化の仲介者」として理論の実践に取り組んでいます。カストロ氏の仕事、そして神田外語グループの取り組みを通じて異文化理解教育の重要性について探ります。（構成・文：山口剛/写真：山口雄太郎/文中敬称略）

文化人類学はフィールドワークの学問である。研究対象のコミュニティーで暮らしながら、その文化の仕組みを明らかにしていく。現地で暮らしていれば言葉は覚えられるが、本当の研究はそこから始まる。言葉は理解できているはずなのに、意味が理解できないことが多々ある。カストロは「異文化の人々を理解するには、文化とコミュニケーションの両方を学ぶ必要がある」と指摘する。

カストロはフィリピン大学で人類学を教える一方で、文化人類学を応用しながら「文化的な仲介者」としても活躍している。国際機関や企業からの依頼を受け、フィリピンの先住民族との仲立ちをしながら、双方に文化理解を促し、文化の懸け橋としての役割を果たしているのだ。

フィリピンは世界でも有数の地熱発電に適した地域である。昭和46（1971）年にはアメリカ資本のフィリピン・ジオサーマル社（Philippine Geothermal, Inc : PGI）が設立され、フィリピンでの地熱発電を開始した。PGIの親会社はユニオン・オイル・カンパニー・オブ・カリフォルニア（the Union Oil Company of California : UNOCAL）社である。平成7（1995）年、PGIは、休止火山の多いルソン島のカリンガ州でも地熱発電所の開発を始めた。平成17（2005）年、アメリカの大手石油会社のシェブロン社がPGIの親会社であるUNOCALを買収し、地熱発電施設の運営を始めた。カストロは平成8（1996）年からPGIとコンサルタントとしての契約を結んでいたが、シェブロン社とも再契約を交わした。

「私はシェブロン社と直接契約を交わしました。大学には仕事の内容を伝え、大学での業務には支障をきたさないと誓約しました。そして、現地の人類学者たちとチームを組み、シェブロン社とのプロジェクトを開始しました」

シェブロン社が目指していたのは、山岳地帯であるカリンガ州に暮らす先住民に地熱発電所の開発を受け入れてもらうことだった。カストロは、シェブロン社とカリンガ州の人々の両方を教育することが自分の役割だと定めた。どちらかだけを教育し、説得するのは適切な方法ではなく、双方に文化理解の働きかけをしていくことこそが、よりよい結果をもたらすとカストロは信じていた。

カストロは、現地に赴くシェブロン社の地質学者たちに「現地に入ったら、まず、長老に『水を1杯いただけますか？』とお願いしてください」とアドバイスをした。水は持っていくので現地でもらう必要はないと考えていた地質学者たちは首を傾げたが、カストロにはきちんとした文化的な裏付けがあった。（1/4）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第8回　ネスター・カストロ　フィリピン大学教授

文化を学び、異文化をつなぐ懸け橋となる

～異文化理解教育の先駆者たち～

異文化との懸け橋になるために必要なのは相手の文化を尊重し、言葉に耳を傾けること

「山岳民族は部族間の戦いが起こると、まず相手の部族の水源に毒を入れるという習わしがあります。ですから、現地の水を飲むという行為は『あなたを完全に信頼しています』という意思表示になるのです。どんなに言葉を尽くすよりも、たった1杯の水を求めるだけで信頼関係が生まれるのです」

カストロにも信頼を勝ち得る常套手段があった。現地に入ると カストロはまず、自分が大学教授であることを伝える。すると、人々は「私たちに何か教えてくれるのか？」と聞いてくる。そこで彼は「違います。文化人類学者として、あなた方の文化を学びに来ました。あなた方は自分の文化について深く知っている。どうか教えてください」と頼むのだ。人々はマニラから来た大学教授が今まで誰からも見向きもされなかった自分たちの文化を研究したいという申し出に衝撃を受け、すぐに信頼関係が構築されるのだという。

カストロは、シェブロン社側だけでなく、カリンガ州の先住民に対しても文化理解を働きかけた。村の外には異なる文化が存在することを理解できるよう促し、アメリカ文化はもちろん、シェブロン社という会社の文化も理解してもらうよう努力した。説明が難しいのは専門用語だ。カストロは先住民の暗喩（メタファー）を使って説明したこともある。文化人類学者だからこそできる文化の仲介であると言えるだろう。

「カリンガ州の先住民たちは結局、シェブロン社の地熱発電所開発を受け入れませんでした。人々はシェブロン社の話を理解したうえで、発電所を受け入れてしまうとコミュニティーの調和が崩れると判断したのです。結果を伝えると、シェブロン社は先住民たちに『私たちの話を聞いてくれてありがとう。どこか別の場所を探すことにします』と言って、潔く撤退したのです。先住民にとっても収入源になるプロジェクトだったので残念でしたが、互いの文化を尊重し合って、結論に達することができたのは成果でした。かつては、先住民の意見を聞かずに強引に進めるプロジェクトが一般的でしたからね。

相手の文化を尊敬し、自分の意見や方法論は押し付けずに、忍耐強く相手の話を聞く。先入観を持たずに、心を開いて、率直になり、相手の話に耳を傾ける。これが異文化との懸け橋になるうえで、とても大切な態度です。今、同じ文化のなかにも多様な文化が存在しています。若者と老人、異性愛者と同性愛者、知的労働者と肉体労働者。しかし、異文化理解の基本は同じです。相手の文化を尊重し、忍耐強く耳を傾けられれば、信頼関係は築けるのです」（2/4）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第8回　ネスター・カストロ　フィリピン大学教授

文化を学び、異文化をつなぐ懸け橋となる

～異文化理解教育の先駆者たち～

外国人教員との交流と異文化を再現した学習環境
人と環境の両面から学生の異文化理解を後押しする

昭和32（1957）年から日本人のための外国語教育に取り組んできた神田外語グループでは、創設当初から「言葉だけでなく、文化を学ばなければ外国人とは対等に付き合えない」ことを強調してきた。

実務的な英語を教える神田外語学院では、1970年代から外国人教員を大勢採用し、外国人と話し、その価値観に触れる機会を学生たちに提供してきた。また、カナダやアメリカでの海外語学研修も実施し、現地の人々との交流を通じて異文化を肌で感じ、外国語を習得する機会を設けてきた。一方で、外国人教員には演劇や書道などを通じて日本文化を学ぶことを促し、学生と教員の両方が文化を学ぶ環境を整えた。

特筆すべきは、当時から「文化こそが外国人とのコミュニケーションを拓く鍵である」という教育方針を打ち出していたことだ。神田外語学院のカリキュラムには「文学と教養」といった課目が盛り込まれ、日本人学生が日本文化を学ぶことを必修とした。前述の海外研修でも浴衣や柔道着などを持っていき、日本文化を紹介することで現地の人々とのコミュニケーションを促したのだ。

神田外語グループは、異文化理解の教育を追求するべく、昭和62（1987）年に神田外語大学を開学した。この大学は英語やスペイン語、韓国語、中国語といった外国語を専攻としながらも、異文化理解に関する科目が専門の必修単位としてカリキュラムに組み込まれた。さらに「異文化コミュニケーション研究所」と「日本研究所」が独自の予算を持った研究機関として設けられ、大学の枠を超えた研究活動や交流が行われた。

平成元（1989）年、神田外語大学ではELI（English Language Institute）を設けた。平成27（2015）年5月1日現在、ELIには63人の英語を母国語とする外国人教員が所属しており、学生はSACLA（Self-Access, Communication, Learner Autonomy）に設けられたELIラウンジに行けば、常駐する外国人教員と交流できるのだ。

神田外語グループは、平成6（1994）年には福島県に国際研修施設「ブリティッシュヒルズ」を設立。中世英国の村を再現した環境で、英語を母語とする外国人スタッフによるサービスや語学研修を受けられる施設を実現した。また、平成20（2008）年には神田外語大学にMULC（Multilingual Communication Center）を設立し、学生がアジアや中南米の建物を再現した環境で過ごせる施設を設けた。外国人との交流と異文化を体験できる環境。神田外語グループではこの両方を充実させ、日本における異文化理解教育の推進に挑戦してきた。（3/4）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第8回　ネスター・カストロ　フィリピン大学教授

文化を学び、異文化をつなぐ懸け橋となる

～異文化理解教育の先駆者たち～

文化とコミュニケーションの両方を学ぶことが世界で生じている問題を解決する糸口となる

カストロはフィールドワークから大学に戻ると、現地で得た経験を学生の教育に反映する。人類学を専攻したものの、卒業後は教員か学芸員ぐらいしか道がないと思い込んでいる学生も多い。文化の理解が多国籍企業の海外進出で重要な役割を担うというカストロの話を聞くと、学生たちは目を輝かせる。人類学、そして異文化コミュニケーションは実社会で役立つ実学的な学問でもあるのだ。

「異文化コミュニケーションは、数多くの専門領域にわたる学問です。マスコミュニケーション、人類学、社会学。文化と文化の間で衝突が生じることもあるので、政治学も関係してきます。異文化コミュニケーションは、まさに専門領域をつなぐ学問であり、だからこそ将来性があると私は思います。

人類は本当に多くのコミュニケーションを必要とします。たくさん話し、ボディーランゲージも使う。しかし、メッセージは必ずしも相手に理解されない。それは、互いの文化的背景を理解していないからです。文化とコミュニケーションは切り離せません。社会で起きている問題の多くは、コミュニケーションの欠如が原因です。異文化を理解し、コミュニケーションを成立させる異文化コミュニケーションは、世界の問題を解決するための有効な手段なのです」

インターネットの発達によって、私たちは世界中の人々とリアルタイムに交流できる手段を得た。だが、異なる国や地域、そして民族や宗派における文化の違いは依然として存在する。簡単に交流できるようになったからこそ、文化とは何かを学び、異文化に対する感性を高めていかなければ問題も生じるのだ。

カストロが指摘するように、相手の話している言葉が分かっても文化的背景が分からなければ、何も理解できていないのに等しいのである。神田外語グループが推進してきた異文化理解教育は、社会のグローバル化が急速に進む今だからこそ、その重要性を増していると言えるだろう。（4/4）

ネスター・カストロ（Nestor Castro）
昭和34（1959）年、フィリピンのパッシグ市に生まれる。小学生のときに友人から18世紀のコインを貰ったことから文化に関心を持ち、文化人類学の道へ進む。フィリピン大学人類学部で博士号を取得。その後も同学部で教え続け、平成22（2010）年8月には学部長に就任した。文化人類学を専門とし、民族間関係や先住民問題などを研究テーマに、フィリピン北部の山岳地帯、東南アジア諸国やミクロネシアでも調査研究を実施。現在は国際社会科学団体連盟（IFSSO）の会長も務める。